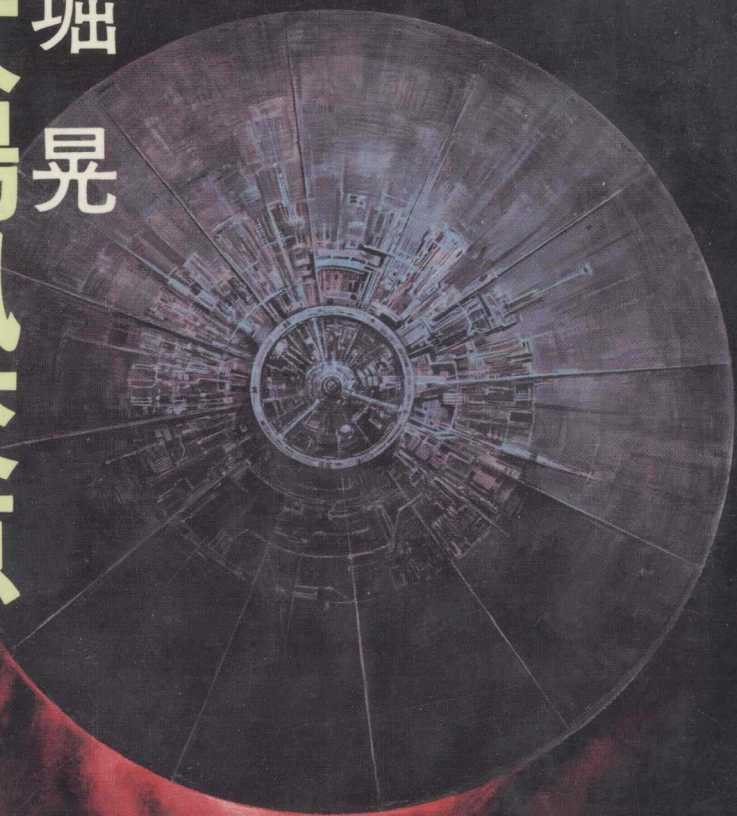


堀 晃
太陽風交点



太陽風交点

堀
晃

早川書房

検印廃止

太陽風交点

昭和五十四年十月十日 印刷
昭和五十四年十月十五日 発行

定価 一二〇〇円

著者 堀 晃 ほり あき

発行者 早川 清

発行所 株式会社 早川書房

郵便番号 一〇一

東京都千代田区神田多町三ノ三

電話 東京 (五四) 一五二 (代)

振替番号 東京・六四七九番

乱丁・落丁本はお取替えいたします

印刷・製本／中央精版印刷株式会社

太陽風交点

目次

イカルスの翼	五
時間礁	三五
暗黒星団	六三
迷宮の風	九五
最後の接触	一二五
電送都市	一五一
骨折星雲	一七五
太陽風交点	二〇九
遺跡の声	二三九
悪魔のホットライン	二七一
解説／小松左京	三〇九

イ
カ
ル
ス
の
翼

氣閘室の空氣が抜けるにつれて、宇宙服の腕や脇腹あたりのたるみが張る氣配があった。私は大きく息を吸いこんで、ぶあつい円形の扉を見た。まもなく、それは開かれるはずだった。外がどんな世界なのかは知らない。食人植物の群生する惑星かもしれないし、太陽系から流れ去る軌道上に放置されるのかもしれない。覺悟はできているはずだったが、脚にかすかなふるえが走った。無重力状態では脚のふんばりようもなかった。

扉の中央の把手が、じりじりと動きだした。操縦室で誰か（多分、あのいまましい情報管理者のひとりだろう）が、宇宙船の中にぎゅちりと詰った電子回路や齒車や発条を通して操作しているのだろう。本当なら、私はこんな狭い氣閘室で不安におびえていることはなかったのだ。それではどうしているはずだといわれると、咄嗟には答えられないが、たとえば、廃墟の雑草の中で立小便しているとか、ともかくもっと爽快な氣分ではたはずだ。もしあのとき、情報省の爆破に失敗してさえいなかったら――。

把手がいっぱいに回って、扉が開きはじめた。思わず息をつめた。扉はあっけなく開いた。星空だった。私の予感にあたったようだ。私はハッチの外縁に手をかけ、泳ぎ出すようにして首をつき出した。その時、宇宙全体が騒^{かげ}るように暗くなった。そんな印象を受けたのは、側面から異様に明るい光が射したせいだった。ヘルメットのフードグラスは紫外線や光から眼を保護するために、光度に応じて色の濃度が変化するのだ。光源は宇宙船に接触するまでにせまっていた。それは、ひかり輝く巨大な岩壁だった。

それが私の処刑の舞台となる星だった。

「地表へ降りろ」耳もとの受話器で声がした。「リフトは使えない。出口から跳躍しろ。踵のマグネットは地表に吸着するはずだ。姿勢は反動ガンで修正すれば大丈夫だ。むしろ救命ロープを結ぶ必要はない」

声にはまるで抑揚がなく、それでいて威圧的な、むしろ脅迫的なひびきがあった。力を持つ者だけに特有の、悲壮感とか危機感といった「魂の叫び」とはまるで無縁の口調。それが情報管理者の声だった。

ハッチから体をのり出すと、側面の地表が視界の半分を占めて、上下感覚を狂わせた。無重力下だったが、私は地表を下に見るように姿勢を変えて、やっとこまかく観察する気になった。宇宙船は地表に突込むような形で浮かんでいたのだ。

太陽は背後にあって、地球で見えるよりもかなり大きく感じられた。その強い直射光をあびた地表には、空気はむろん無く、まばゆく輝く岩地がつづいているだけだった。影の部分の不規則な模様

が、岩の突起のはげしさを示している。地表まで五十メートルほどありそうだったが、大きく弧を描いた地平線がすぐに見わたせた。

「ここが小惑星であることは明らかだった。

「地表へ降りろ」再び声がした。

私は水泳でもするような姿勢でハッチのへりを蹴った。宇宙船の腹にそって落下しながら、無器用に反動ガンを四回も使って姿勢を変えた。どうにか地表についた。踵が岩の表面に吸いついた。

見上げると、宇宙船は頭上にのしかかりそうに浮かんでいた。銃撃でもされるのだろうか。不安にかられて、周囲に眼をやった。右に急な崖があり、正面から左にかけては岩の突起とひび割れの連続だった。

「特級犯二号」受話器に声があった。私を呼んでいるのだった。

「何だい」気楽に答えたつもりだったが、声がふるえたような気もした。

「今から所定の刑を執行する訳だが、あらかじめそれに関する注意を与えておく」

声は事務的な口調で説明をはじめた。

「この刑は情報省内に置かれた特別法廷で決定されたもので、昨年、特級犯一号に対して行なわれたものと同じだ。すでに承知だろうが、特級犯一号は死亡した。ただ、刑の執行法について明らかにしていなかった点に問題があったことは認められたので、今回の執行については、現在、同時に地球でも公表されることになっている。——つまり、この刑は最大の関心をもって見守られている訳だ」

（要するにどんな殺し方をするんだい）私の関心はそれだけだった。私は再び宇宙船を見上げた。その巨大なシルエットは、正視に耐えかねるほどの逆光の中で、こうごうしくさえ見えた。

「刑の執行法だが——」

私は緊張した。

「この星に六十日間置き去りにする。それだけだ。八十日分の食料はじめ、生活に必要な資材は、すべて崖の下あたりに置かれている。その他の資材も、思いどおり自由に使用してよい。本船はこの後ただちにここを去り、正確に六十日後に、この星を再訪する。その時生存が確認された場合、地球へ帰還できる」すこし間があった。

「地球へ生還できた場合には、当然あらゆる個人的な拘束は解かれる訳だが、ヘディス運動／＼組織についても、その合法制が再考されることになっている。これは特級犯一号の場合についても同じだったことだから、特に説明する必要もあるまい。その点については組織内で検討済みのことと思われる。……以上の点について質問はないか」

むしろ私にはあっけなかった。崖下のあたりにそれらしい資材が積み上げられていたし、宇宙生活についての注意は、ここまでの護送中に最小限は受けていた。

「特に……ないが……」不安はあったが、そうとしかいえなかった。間があった。それから、同じ調子で説明があった。

「念のため注意しておくが、この星は小惑星イカルスだ。いうまでもないが、この星の公転周期は四〇九日強、離心率は小惑星中最大で〇・八二六九二三二ある。特に数値を記憶する必要はないが、

軌道短半径は地球軌道に対して○・一八六六——つまりイカルスは水星軌道の半分以上まで太陽に近づくことになる。生活、上、注意すべき点はこれだけだ。この星の現在位置は、すでに水星軌道のかなり近くにあって、太陽への最近点まであと三十日ある。……以上で刑の執行に関する説明を終る」

やっと処刑の意味がわかった。水星軌道の半分以上まで太陽に接近する小惑星。——太陽光線の強烈さも文字通り氷解した。いや、氷を解かす程度の熱さどころではない。灼熱地獄。燃える小惑星。フライパンの上で跳ね上がる小魚の姿がふと浮かんだが、イメージとしてはずいぶん貧弱な気がした。

「なお、テレビ通信をはじめ、一切の通信は六十日間断たれることになる。この星から地球への中継も行なわない。刑の結果は六十日後までは確認できないことになっている。……以上で説明を終る」

私は何か「最後の一言」（たとえば、幸運を祈る）があるのではないかと構えた。が、頭上の宇宙船はすでに補助噴射を行なって方向を変えはじめていた。もしかすれば……私は考えた。刑の説明をした情報管理者は、この宇宙船には乗っていないのかもしれない。地球で、空気調節の行きとどいた部屋から、電波を通して話していた可能性もある。やりかねないことだった。

突然、宇宙船は後部から巨大な光芒を吐いた。音も振動もなく、船体は動きはじめ、みるみる速度を上げていった。私はしばらく岩地に立ちつくしてその姿を追ったが、太陽のまぶしさにまぎれて、たちまち視界から消えた。完璧な静寂だけが残った。

こうして、イカルスでの生活がはじまった。

山積みされた資材は金網で覆われていた。太陽が崖の向うに移って、あたりは影につつまれていた。私はキャップライトをつけて点検をはじめた。金属板に品名と番号が刻まれていて、大小の貨物の標示番号と照合すればよかった。

食料と住居用ドームを別にすれば、貨物の大半が小型ロケット製作用の部品であることは、すぐに見当がついた。何のことはない、近頃よく見かける子供用の組立セットと原理的に変わるところがないからだ。（つまり噴射の制御や燃料関係についての原理は知らなくても宇宙船が作れる訳で、科学技術についての私の無知を考慮しての措置にちがひなく、屈辱を感じない訳にはいかなかったが、それ以上の方法で私に宇宙船の製作が可能であるとは思えなかった）

まず住居が必要だった。金網を外さなければならなかった。貨物はそれぞれにつながれていて、網を外しても流れ出す危険性はなかった。一端を注意深く外して、直径五メートルほどある半球形の住居ドームを、私は右手で軽々とつかみ出した。それを横に置いて、念のために網を元通りにかけた。ふり向いた時、私は一瞬うろたえた。ドームが二メートルほどの高さに浮かび上がっていたのだ。私はあわてて蛙みたいな恰好でドームに飛びついた。この地点では重力よりも遠心力の方が大きいしかなかった。どこかに住居を固定しなければならなかった。

崖の面に沿ってライトを当てていくうちに洞窟らしいものを発見した。のぞき込むと、五、六メートルの奥ゆきがあった。ドームをゆるゆる押し込んでみると、両側にわずかの隙間をのこしては

まり込んだ。住居ドームにはうってつけの穴といえた。これだけの岩に囲まれていれば相当の高温にも耐えられるだろう。

ドームの入口を手前にしてぎりぎりまで押し込み、楔くさびと電動ハンマーを取り出してきて、前部を三カ所固定した。工具使用の不手際と、この星では極めて緩慢にしか動けない事情から、この作業だけで三時間を費した。さらに酸素ボンベの取り付けが終った時には、私は名状しがたい疲労感に襲われた。空腹でありながら吐き気がこみ上げてきた。まだ無重力になじめないらしかった。眠る必要がありそうだった。太陽はとくに隠れてしまって、頭上は凍てついたような星空だった。

私は住居用ドームにもぐり込んだ。ドームは金属製の半球体で、二重の気密室に酸素ボンベが取り付けられる「宇宙簡易住宅」だった。狭い気密室で宇宙服を脱いで、私は裸のまま室内へもぐり込んだ。空気調節は完璧だった。私は体を伸ばして浮かび上がった。……私はひとつの失策に気づいた。ドームの取り付け方向を間違ったのだ。ごくわずかではあるが重力より遠心力の大きいこの地点では、物は丸い天井に吸いつけられてしまうのだ。上下を逆にすべきだった。

やり直す気力はなかった。無重力に等しい状態なのだから、気分だけの問題だ。こうもりみたいな恰好でも、眠れるうちに眠っておいた方がいい。そのうちスタイルなど構っていらなくなる。私は空中に浮いたまま眼を閉じた。

後悔してもはじまらないのだが、情報省爆破の失敗だけは、思い出すだけで、首筋が熱くなるような屈辱をおぼえる。英雄にふさわしい華々しささえあれば、死んでいた方が良かったのかもしれない。

ない。〈ヘイス運動〉の今後の立役者にふさわしい往生際ではなかった。……私はここで愚痴をならべるつもりはない。ただ、失敗に至った経緯だけを書いておくことにしたい。

機械知能の人間凌駕というのは、昔から予想されていたことだが、それは、「ある日突然の電子頭脳の叛乱」というかたちでは訪れなかった。三十年ほど前といえば、人間がはじめて月に着陸して、宇宙旅行が日常性への衝撃力を失いはじめた頃だが、「コンピュータ信仰」が生まれたのもその頃だった。電子計算機は人間を二種類に分けた。電算機を道具として使える人間と使えない人間。後者にとつては、コンピュータというものは超人的な能力を持つ怪物だった。「コンピュータの予言」「コンピュータの作曲した歌」「コンピュータが演出するショー」……多くの場合、計算機は確率計算にのみ用いられたただけなのだが、優れた感受性を持つ人たちは、そこに後光の輝きを見いだすことができるらしかった。

私は電子工学の発達史をおさらいするつもりはない。電算機を使う人間が何を考えているのかを書いておきたいのだ。——三十年間にコンピュータは日常生活に完全に定着して、子供でも老人でも簡単に使っている。が、使えるようになったところで、内面はそう変わったわけではない。「家庭に一台」といえるほど普及した入出力装置を簡単に操作しながら、その彼方に人格以上の存在を感じている人間は多かったのだ。この段階では明らかに無知のせいといえた。彼らはそう難しい計算に電算機を使っていたわけではないし、そこに形而上的な意味などまるでなかったのだから。だが、ある種の事大主義で、数学的能力の欠如と素朴な感嘆は、コンピュータの擬人化と漠然とした不安に置き換えられねばならなかった。……妙にてれることはやめよう、私自身がそうだったのだ。